

朝鮮学会

第76回大会要項

(学会創立75周年記念大会)

会 場：天 理 大 学

2025年10月4日(土)・5日(日)

(2025 年度) 第 76 回 朝鮮学会大会プログラム

1. 日 時：2025 年 10 月 4 日（土）・5 日（日）

2. 会 場：天理大学

3. 大会プログラム

第 1 日 10 月 4 日（土）

1) 基調講演及び報告 13:00～16:15（9 号棟）

I. 基調講演「明治至昭和期の朝鮮本蒐集家たち」

富山大学・麗澤大学 名誉教授

藤 本 幸 夫 氏

II. 報 告「日本における朝鮮学の過去と未来」

東京大学大学院 准教授

河 崎 啓 剛 氏

新潟県立大学 講師

高 橋 梓 氏

新潟大学大学院 助教

川 西 裕 也 氏

2) 総 会 17:00～

3) 茶 話 会 17:40～（総会終了後） 於：心光館 1F 食堂

（＊大会期間中は、天理図書館で特別展示を行います。）

第 2 日 10 月 5 日（日）

研究発表会 09:00～

《（講）非常勤講師 / （研）研究員 / （院）大学院生》

＊タイムテーブルは当日の進行状況により変更になる場合がございます。

◆第 1 部門：語学分野（2 号棟 22A）

1. 09:00～09:30

朝鮮（韓国）語初級テキストの音韻攷（その 2）—音韻の認識と指導要領を巡って—

関西外国語大学（講）金 錦 花

2. 09:35～10:05

日韓ドラマの台詞および字幕における動詞表現の比較研究

北星学園大学（講）八 幡 早 苗

3. 10:10～10:40

日韓の字幕・吹き替え翻訳における文化要素の処理—『KPop Demon Hunters』を事例として—

札幌国際大学 趙 恵 真

4. 10:45～11:15

補助動詞（-고）다니다：習慣、評価的意味

熊本学園大学 黒 島 規 史

5. 11:20～11:50

現代朝鮮語における両極性についての試論

天理大学 高 地 朋 成

〈昼食：11:50～13:00〉

6. 13:00～13:30

韓国地名における後部要素「-골」「-실」の分布について

北海商科大学 水 野 俊 平

7. 13:35～14:05

中世韓国語の助詞連続「-과로」について

東京大学（院）石井洋一郎

8. 14:10～14:40

中期朝鮮語および近世朝鮮語の「-디라」について

熊本学園大学 高 橋 春 人

9. 14:45～15:15

『捷解新語』における아 / 어形節および아서 / 어서形節の複文構文の一考察 早稲田大学 崔 チョンア

10. 15:20～15:50

『三綱行實圖』、『續三綱行實圖』、『二倫行實圖』に共通してみられる刻手名について

東北大学 澁 谷 秋

11. 15:55～16:25

延辺朝鮮語の 1 音節語幹用言のアクセントの変化に関する研究

東京大学（院）國 分 翼

12. 16:30～17:00

韓国語慶尚道方言の語頭閉鎖音の知覚における世代差の研究

龍谷大学 徐 旼 廷

◆第 2 部門：文学分野（2 号棟 23A）

1. 09:00～09:30

3 冊の『歌集』—祖国解放戦争時、人民軍は何を歌ったか—

早稲田大学 布 袋 敏 博

2. 09:40～10:10

金史良の全集未収録作品「風とボットリ」について

埼玉大学 柳 川 陽 介

3. 10:20 ~ 10:50

金裕貞小説における土着性と翻訳可能性：「春・春」を手がかりに

東京大学 相川 拓也

4. 11:00 ~ 11:30

『アンネの日記』と翻訳の位置—東アジアにおける日記を書く少女の肖像と歴史的記憶—

成均館大学校 朴 珍 英

〈昼食：11:30 ~ 13:00〉

5. 13:00 ~ 13:30

「マッチ売りの少女」翻訳の植民地的無意識

成均館大学校(院) 李 麗 珍

6. 13:40 ~ 14:10

貞一軒の周辺人物と詩作背景

近畿大学 山田 恭子

◆第3部門：歴史学・考古学・文化人類学・その他の分野（2号棟23B）

1. 09:00 ~ 09:30

朝鮮放鷹文化における書物の役割—『鷹鵠方』諸本の本文の検討から—

長野県立大学 二本松 泰子

2. 09:35 ~ 10:05

朝鮮中宗代~明宗代における王朝政府の尼僧管理をめぐる論議

九州大学(講) 押川 信久

3. 10:10 ~ 10:40

沙也可(金忠善)と沙汝某(金誠仁)—壬辰戦争後の朝鮮社会における降倭たちの存在様態と相互ネットワーク—

天理大学 長森 美信

4. 10:45 ~ 11:15

「風俗画家」金弘道の誕生—朝鮮絵画史における価値評価の変遷と構造をめぐる—

東京大学(研) 中尾 道子

5. 11:20 ~ 11:50

白鳥庫吉が私立成田図書館に寄贈した朝鮮王朝儀軌に関する調査報告

東京大学 辻 大和

〈昼食：11:50 ~ 13:00〉

6. 13:00 ~ 13:30

1910年代における『童蒙先習』の変容と日本における変容について

京都府立大学(研) 平 木 實

7. 13:35 ~ 14:05

植民地朝鮮における「畑作改良増殖計画」—食糧畑作物としての粟と大麦を中心に—

熊本学園大学 土井 浩嗣

8. 14:10 ~ 14:40

「三宅事件」後の京城帝国大学法文学部

武蔵高等学校中学校 通堂 あゆみ

9. 14:45 ~ 15:15

「皇国臣民」と民族間の序列—「皇民化」政策の見直し—

桃山学院大学 青野 正明

10. 15:20 ~ 15:50

「昭和19年」の京城帝国大学

九州大学 永島 広紀

11. 15:55 ~ 16:25

龍安寺方丈襖絵にみる戦後の文化的潮流—金剛山の描写をめぐる朝鮮への視線と禅的空間—

立命館大学(講) 朴 株 顯

12. 16:30 ~ 17:00

韓国社会における在日コリアンの同胞化と言説の変容—ブルーベイカーの「越境的ナショナリズム」と「外的な帰属の政治」を手がかりに—

神田外語大学(講) 小川 一枝

基 調 講 演

明治至昭和期の朝鮮本蒐集家たち

富山大学・麗澤大学 名誉教授 藤 本 幸 夫

報 告

日本における朝鮮学の過去と未来

東京大学大学院 准教授 河 崎 啓 剛
新潟県立大学 講師 高 橋 梓
新潟大学大学院 助教 川 西 裕 也

1. 朝鮮（韓国）語初級テキストの音韻攷（その2） —音韻の認識と指導要領を巡って—

関西外国語大学（講） 金 錦 花

本発表は、この40～50年間に渡る、日本での朝鮮（韓国）語の教育がどのように進められてきたのかについて、特に朝鮮（韓国）語の音韻面にフォーカスして、1962年から2024年までに出版されたテキスト141冊を検討対象に、下記の（1）～（7）で提起する音韻の認識、および学習指導要領について再考することとする。具体的には、（1）Zero子音「ㅇ /-」の認識によって子音分類の異なる様相、（2）‘無声の滑空 (Voiceless Glide)’ 原理と平音・激音・濃音の発音指導について、（3）「ㄱ /je/」と「ㅋ /je/」の発音方法、および子音との結合における発音指導方法の移り変わり、（4）「어 /ə/」の発音変遷に続く（金 2025）発音要領の様々な見解、（5）「외 /we/」発音指導要領におけるその変遷について、そして（6）では発音規則に関する異なる認識について論ずる。①リエゾンについての異なる認識、②激音化における“っ”が付くことについて認識の変化、例えば놓고 [녹코/노코] 놓다 [놀타/노타] 놓지 [논치/노치] であり、③未来連体形語尾「을」に関する様々な語尾、即ち「-을 수」「-을 지도」「-을 것」等の濃音化の発音指導について、④「좋습니다」の発音について141冊のテキストはどのように解釈、説明してきたのかについて概観する。（7）音声指導において発音記号に学習の有効性、及びいくつかの子音における発音記号の異なる表記、国際音声記号とローマ字発音記号の異なる記号の使用について述べる。

【参考文献】

- 金思燁（1998）『古代朝鮮語と日本語』明石書店（1981年、六興出版から刊行）
- 福井玲（2013）『韓国語音韻史の探求』三省堂
- 李翊燮・李相億・蔡琬 著（2004）『韓国語概説』梅田博之 監修 大修館書店
- 李崇寧（2006）『中世韓国語文法』松原孝俊監修・石橋道秀 訳 花書院
- 金錦花（2025）「朝鮮（韓国）語の初級テキストの音韻攷—音韻の分類と認識を巡って」『日本韓国研究』研究会誌第5号 日本韓国研究会（近刊）
- 고영근（2002）『표준중세국어문법론 집문당』 개정판
- 국립국어연구원『한국어 어문 규범』표준어 규정 [시행 1989. 3. 1.] 문교부 고시 제 88-2 호 (1988. 1. 19.)
- 노대규 외（1991）『국어학서설』신원문화사 (2005년 초판 14쇄)
- 이관규 (1999)『학교문법론』도서출판 월인 (2020년 개정판 1쇄)
- 이석주, 이주행（1994）『국어학개론』대한교과서주식회사

2. 日韓ドラマの台詞および字幕における動詞表現の比較研究

北星学園大学（講） 八 幡 早 苗

本研究は、日本語と韓国語の動詞表現の違いが実際の日韓ドラマの台詞と対訳字幕にどのように現れているのかを調査し、日本語と韓国語の動詞表現の違いを探ることを目的としている。また、日本ドラマと韓国ドラマで対訳字幕の現れ方に違いがあるのかについても調べるため、本研究では日本ドラマ 10 本の台詞と韓国語対訳字幕、韓国ドラマ 10 本の台詞と日本語対訳字幕からパラレルコーパスを構築し分析を行った。特に動詞表現と構文の違いを探るために、ドラマの台詞の中でも動作主と被動作主が両方存在する他動性の強い文章を中心に台詞と対訳字幕を比較・分析した。その結果、韓国ドラマ・日本ドラマ共に同じような表現の違いが見られた。

日本ドラマの台詞では「殺される」という表現が多用されるが、その台詞の韓国語対訳字幕では「殺される」に該当する語彙「살해당하다」、「살해되다」の他に「죽이다 (殺す)」や「죽다 (死ぬ)」と訳される場合が見られた。

(1) 台詞 (日) : 殺される 早く助けて !

字幕 (韓) : 날 죽이려고 해요 ! 살려 줘 ! (MIU404, 3 話)

(2) 台詞 (韓) : 오늘 당신 아빠가 날 죽이려고 했다 ?

字幕 (日) : 今日 あなたのお父さんに 殺されそう になった (사이코지만 괜찮아, 11 話)

(1) の場合どちらも主語は省略されているが、日本語の台詞では被動作主である「自分」が主語になっており、「殺される」という受け身表現が使用されている。対して韓国語の対訳字幕では主語は動作主であり、「私を殺そうとしている」という能動文になっていることがわかる。韓国ドラマにおいても同じように動詞「죽이다 (殺す)」を使用した台詞の日本語対訳字幕では「殺す」と訳される場合と、受け身表現を用い「殺される」と訳される場合が見られた。(2) の韓国語の台詞でも同じく動作主が主語になっており、人間の行為を中心に表現されている。対して日本語字幕では、被動作主である「自分」が主語になっており、被害に遭う状況を強調して表現されていることがわかる。

(3) 台詞 (日) : 私の大事な家族を壊された !

字幕 (韓) : 내 소중한 가족을 잃었어 ! (VIVANT, 10 話)

(4) 台詞 (韓) : 도와 달라고 부탁해서 하고 있잖아요

字幕 (日) : 頼まれて 仕方なく (청춘기록, 8 話)

(3) の日本語の台詞では「誰かによって壊された」という被害の意味が強くなっているが、韓国語の字幕では「家族を失った」という結果中心の表現になっている。また、(4) の日本語の字幕では受け身表現を使用することにより「自分はしたくなかったのに」というニュアンスが強くなっている。このように、台詞と字幕を比較するとニュアンスの違いが見られ、台詞の印象と字幕の印象が変わる可能性がある。

本研究では字数に制約のあるドラマの対訳字幕を用いて分析を行ったことから、字幕による影響も考えられるため、今後はドラマの台詞・字幕だけではなく多様な資料を用いて日本語と韓国語の動詞表現の違いを検証する必要がある。

3. 日韓の字幕・吹き替え翻訳における文化要素の処理 — 『KPop Demon Hunters』を事例として—

札幌国際大学 趙 恵 真

多言語で展開される映像作品において、翻訳は単なる言語の置き換えにとどまらず、文化的要素や表現スタイルの再構築を伴う。とりわけ字幕と吹き替えは、媒体としての特性が大きく異なるにもかかわらず、それらを対照的に扱った研究は依然として多くはない。加えて、同一作品内での言語別・形式別の翻訳対応を文化的観点から分析する試みも、十分に蓄積されているとはいえない。

本発表では、アニメーション『KPop Demon Hunters』を対象に、英語字幕を原典とした日本語字幕・日本語吹き替え、韓国語字幕・韓国語吹き替えの四種の翻訳を分析する。字幕と吹き替えという翻訳形式の違い、さらに日本語と韓国語という言語的背景の相違に着目し、それぞれにおいて文化要素がどのように翻訳されているかを検討することを目的とする。

分析にあたっては、以下の二点に焦点を当てる。第一に、固有名詞やキャラクター名称、アイドル文化などの文化的語彙に加え、感情表現・比喩・ユーモアといった文化的背景に深く関わる言語的特徴が、日韓における字幕および吹き替えでいかに翻訳されているかを検討する。これらは語彙選択、文体、文脈に強く依存するため、翻訳では直訳・意訳・省略・言い換え・具体化など多様な処理が行われている。例えば、「Okay, tonics. Let's do this. What?」というセリフにおける「tonics」は、日本語字幕では「頼むから効いてね」と訳され省略的に処理され、日本語吹き替えでは「よし、薬、やってやろう」と具体化されている。一方、韓国語字幕および韓国語吹き替えでは、「좋아 한약아, 잘해 보자」「자, 한약아, 너만 믿는다」と訳され、「한약」という語を用いることで韓国文化に即した翻訳が行われている。第二に、字幕と吹き替えという媒体の形式的制約が翻訳の内容や表現に及ぼす影響を分析する。字幕では表示時間や画面スペースの制限から情報の省略や簡略化が求められている一方、吹き替えでは音声としての自然さやキャラクターの話し方との整合性が重視され、補足や意識が多く用いられる。また、文化的共有度の違いに応じて、説明の追加や一般化、省略など、言語間で異なる翻訳方針がとられる傾向も確認される。

以上の分析を通じて、本発表は翻訳形式および言語の違いによって文化要素がどのように異なる形で提示されるかを明らかにすることを目指す。同一作品の多言語展開に伴う翻訳対応の実態を具体的に検証することで、映像翻訳における文化的配慮のあり方を考察する一例として、今後の議論の一助となることを期待する。

4. 補助動詞 (- 고) 다니다 : 習慣、評価的意味

熊本学園大学 黒 島 規 史

本発表では、現代朝鮮語の動詞 다니다 (行き来する、歩き回る) が文法化し、補助動詞として用いられることを記述する。(1) における、- 고 の後に続く 다니다 は、もはや移動の意味を表しておらず、習慣的な行為であることを表し、さらに聞き手への非難という評価的意味 (evaluative meaning) を帯びている。

(1) 너 화장실 불 **안 끄고 다닐** 거야?

「あんた、トイレの電気消さないつもり？」 [로맨스는 별책부록 ep. 8]

(- 고) 다니다 は補助動詞の網羅的な研究である손세모들 (1996)、アスペクト的な補助動詞を扱った남신혜 (2019) でも補助動詞として扱われていない。そのような中、松岡 (2019) が唯一 다니다 の補助動詞としての用法について考察している。松岡 (2019) で扱われている (- 고) 다니다 の例は、ある程度本動詞としての移動の意味が残存している例であるためか、これを他の補助動詞より文法化が進んでいないと見ている。しかし、(1) のような例を見ると、(- 고) 다니다 には文法化が進んだ用法もあると考えることができる。

本発表では韓国ドラマから (- 고) 다니다 の例を収集、分析し、다니다 の本動詞としての意味 (移動；～して回る) を残した用法 (2) から、習慣を表す補助動詞としての用法 (3)、習慣に加えて非難の意味を帯びる補助動詞としての用法 (4) に至るまで、大きく3つの段階を持って存在しているということを述べる。これはあくまで段階的なもので、中間的な場合も認めうる。移動の用法は2つの節から成り、다니다 は文法化を経ていないようにも見えるが、ここではある程度文法化の段階にあるものと考えられる。それは、松岡 (2019) が指摘しているように結合する動詞は主に他動詞に偏っており、動詞の選択に制限が生じているからである。

・移動 (～して回る)

(2) 아니, 제가 현금을 **안 갖고 다녀요**.

「あの、わたし現金持って歩かないんですよ。」 [갯마을 차차차 ep. 1]

・習慣

(3) 선생님 허락 **말고 다녀야** 돼요?

「いつも先生の許可をもらわないといけないんですか？」 [청춘기록 ep. 14]

・習慣＋非難

(4) 아, 노크 좀 **하고 다녀**.

「もうノックしてって！」 [킹더랜드 ep. 14]

(- 고) 다니다 が表す非難の評価的意味は、習慣に由来するものと考えられる。他者への評価を下すには、ある程度事態が繰り返し観察される必要があるからである。このような事例は日本語諸方言にもある。西日本方言諸方言で用いられ、進行や習慣を表す「- ヨル」が、関西中央部方言では「軽卑的」に用いられる (井上 1993)。

朝鮮語の補助動詞には、ある事態に対する話者の「望ましさ」を反映した、評価的意味を表すものが存在する。例えば、(- 아 / 어) 버리다 (～てしまう) については先行研究においても、しばしば望ましくない結果を表すとして論じられてきたし、(- 고) 앞다 (～てやがる) などとも取り上げられてきた。このような他の評価的意味を表す補助動詞の研究にも、本発表の成果は貢献するところがあるだろうと考えられる。

5. 現代朝鮮語における両極性についての試論

天理大学 高地 朋 成

本発表は、現代朝鮮語において命題の真偽が明確に確定しない中間的意味を示す文法形式群に着目し、それらを両極性 (bipolarity) という独立した意味論的カテゴリーとして提案する。考察対象は次の (1) のとおりである。

(1) 【考察対象】

‘II- ㄹ락 말락 하다’, ‘{I- 는 / II- ㄴ / II- ㄹ } 둥 { 마는 / 만 / 말 } 둥하다’,
‘{I- 는 / II- ㄴ / II- ㄹ } 듯 { 마는 / 만 / 말 } 듯하다’, ‘I- 기도 하다’, ‘II- ㄹ 수도 있다’

先行研究として高地 (2018) は ‘II- ㄹ락 말락 하다’ による動作局面の描写と確信度を示す副詞の非共起を指摘し, 다카치 (2022) は ‘{I- 는 / II- ㄴ / II- ㄹ } 둥 { 마는 / 만 / 말 } 둥’ と ‘{I- 는 / II- ㄴ / II- ㄹ } 듯 { 마는 / 만 / 말 } 듯’ 間の類似点と相違点を詳述した. 신희성 (2019) は ‘I- 기도 하다’ の頻度的機能に着目し議論を深めた. また, 안주호 (2004) は ‘II- ㄹ 수 있다’ をモダリティの観点から論じた. しかしながら, これらの先行研究は個別形式の記述にとどまっている. 各形式を横断的に記述し, その共通特徴としての両極性を認識的モダリティと比較し, 体系的に論じる研究が現状存在しないことが, 本発表の持つ問題意識である.

本発表は次の①～③を根拠にして, 両極性というカテゴリーの独立性と事実性における複層的機能を指摘する.

① 両極性が (A) 肯定と否定の局面が連続的かつ交錯的に反復する様相を描写する「肯否反復」と (B) 異なる時空間的場面に存在する肯定的側面と否定的側面の並立的提示をする「肯否並立」とに分類されるということ.

② 両極性が, 「高低の幅を持った確信度という尺度」ではなく, 「真と偽の二極点の範疇的並存」により中間的事実性を暗示すること.

③ 以下の (2) が示すように, 同一文中で両極性と他のカテゴリー (認識的モダリティや証拠性等) との共存も見られること.

(2) a. 그것은 결혼이란 형식을 거칠 수도 있고 그렇지 않을 수도 있을 것이다.

それは結婚という形式をとるかも知れないし, 取らないかもしれないであろう.

b. 내가 준비한 노래를 듣는 둥 마는 둥 하더라.

私が準備した歌を聴いたり聴かなかったりしていたよ.

【主要参考文献】

高地朋成 (2018), 「分析的な形 ‘II- ㄹ락 말락 하다’ について」, 『韓国語学年報』第 14 号, 神田外語大学韓国語学会, pp. 43-69.

다카치 토모나리 (2022), 「의존명사 ‘둥’ / ‘듯’ 반복 구성체의 공통점과 차이점」, 『어학연구』제 58 권 1 호, 서울대학교 언어교육원, pp. 91-118.

신희성 (2019), 「‘I- 기도 하다’ 의 양태 의미 연구」, 『우리말글』제 82 호, 우리말글학회, pp. 29-58.

안주호 (2004), 「‘I- ㄹ 수 있-’ 구성의 특성과 문법화」, 『한국언어문학』제 53 호, 한국언어문학회, pp. 207-232.

6. 韓国地名における後部要素「-골」「-실」の分布について

北海商科大学 水 野 俊 平

韓国の地名において「谷」をあらわす後部要素には「-골」「-실」がある。これらは地名の末尾に置かれ、その地名が「谷」であることをあらわす接尾辞である。これらは古代朝鮮語にまで遡ることができるが、先行研究では「-골」の起源を高句麗地名に見られる「忽」と関連付けて論じている。『三国史記』において「忽」が含まれる地名は48地名であるが、そのうち47地名が高句麗地名であり、1地名のみが百濟地名である。高句麗の複数地名において「忽」は「城」との対応を見せることから「城郭」という意味を持ち、満洲語の「holo（山・谷）」に対応すると見られることから「山岳」「溪谷」という意味を持つものとされ、[*xol][*hol][*kol]という高句麗語として再構されている。『龍飛御天歌』など中世朝鮮語資料に見られる地名にも「-골」が見られるが、これらは「忽」から由来したものと、「ᄃᆞᆫ」から由来したものが混在していると思われる。

一方の「실」も、『三国遺事』に収録された複数地名に「糸」と「谷」が対応する例があるため、古代朝鮮語にまで遡ることができる。この地名は蔚州の地名であることから、「실」が新羅語である可能性も指摘されている。17～18世紀に刊行された『澤堂集』にも「室」が「谷」をあらわすと記されているため、「실」は近世朝鮮語でも使われていたものと思われる。ただし、「골」と異なり「실」は地名の後部要素のみで用いられ、単独で用いられた例はない。

先行研究では地名における「-골」「-실」の分布に偏りがあり、「-실」は主に朝鮮半島の南部に分布していることが指摘されている。また、「-골」は「谷」以外に「集落」をあらわす後部要素であるため、その地名が「谷」であることを示すために「-실」が用いられるようになったという指摘もある。しかし、韓国全土を網羅する地名データベースの不在により、こうした先行研究の成果も、まだ十分に検証されていない。

本発表では韓国の地名事典である『韓国地名総覧』のデータベースに収録された溪谷地名から「-골」「-실」が含まれた地名を抽出し、その分布を示した。その結果、出現数において「-골」は「-실」を圧倒していることが明らかになった。「-골」の分布は韓国全土に亘っているのに対し、「-실」の分布は全北・全南・慶北・慶南に限定されている。ただし、「-실」の分布は京畿・江原・忠北・忠南などにも僅かながら見られ、かつてこれらの地域にも広く分布していた可能性がある。また、「-실」に「-골」が添加された「-실골」が含まれる地名の分布、同地点に「-골」「-실」を含む地名が併存する「複数地名現象」の分布を通して、「-골」の伝播と拡散によって「-실」が浸食された痕跡があることを明らかにした。

7. 中世韓国語の助詞連続「-과로」について

東京大学(院) 石井洋一郎

本稿は発表者の未公開修士論文「中世韓国語の助詞連続「-과로 (-kwaro)」の意味に関する研究」の内容を修正・再整理して口頭で発表するものである。

中世韓国語には二種類の助詞「-과」と「-으로」からなる、現代韓国語では用いられない助詞連続「-과로」が存在する。従来の研究では「-과」と「-과로」の意味の違いが充分明確にされず、「-과로」は「-과」と同様に共同行為の相手（～‘と’一緒に）や比較対象（～‘と’同じだ、異なる）を表示するものと記述されてきた。

本研究では「-과」と「-과로」の間に意味の違いが存在するのか、また存在するならばいかなる違いであるのかを調べるために、中世韓国語に現れる「-과로」の用例の全数調査を行った。その結果、①「-과로」の意味は「-과」よりも限定的であり、[統率]と[合致]という二種類の用法を立てて説明できること、②出現する「-과로」の用法は文献ごとに偏りがあることがわかった。以下、その概略を述べる。

まず、非諺解体の文献（漢文対訳形式になっておらず、必ずしも漢文直訳的ではない点で、当時の比較的自然な韓国語を反映していると考えられている文献。具体的には『釋譜詳節』、『月印釋譜』、『三綱行實圖』。）においては[統率]用法のみが見られる。この[統率]用法の中核的意味は【(i) 主語が「-과로」のつく対象に働きかけ、(ii) その対象を主語自身の主導する行為に参加させる】というものである。したがって、例えば「集團のリーダー가 集團-과로 共に来る」のように、統率される側に「-과로」がつく文は可能だが、「*集團가 集團のリーダー-과로 共に来る」のように、統率する側に「-과로」がつく文は不可能である。これに対して「-과」にはそのような制約はなく、上の二例のどちらについても使える。

次に、諺解体の文献（漢文対訳形式であり、したがって漢文直訳調の文献。上述の非諺解体の3文献を除いたほとんどの中世韓国語の文献。）においては、上述の[統率]用法も出現するが、これに加えて[合致]の用法が見られる。この[合致]用法の中核的意味は【主語が「-과로」のつく対象と合致する】というものである。[合致]用法の「-과로」の根底には、2つの対象が「ぴったり合致するのか、そうではないのか」という二項対立的な視点がある。例えば、「-과로」は「A는 B-과로 同じである / 異なる」のように二項対立的判断を表す文で用いられ、そのどちらでもない「*A는 B-과로 似ている」のような「類似」を意味する文では用いられないという特徴が見られる。これに対して「-과」にはこのような制限はなく、「類似」を表す場合にも広く用いられる。

8. 中期朝鮮語および近世朝鮮語の ‘-ㄴ디라’⁽¹⁾ について

熊本学園大学 高 橋 春 人

中期朝鮮語および近世朝鮮語の ‘-ㄴ디라’ および ‘-ㄴ디라’ の用法を明らかにすることを目的とし、いくつかの特徴について報告する。現代朝鮮語の辞書には、‘-ㄴ지라’ および ‘-ㄴ지라’ という語尾が記載されている。語源的にはどちらも「連体形＋形式名詞ㄴ＋コピュラ」に由来すると考えられるが、一部の辞書を除き、‘-ㄴ지라’ は接続形、‘-ㄴ지라’ は終止形の語尾として分類されている。これに対し、中期朝鮮語および近世朝鮮語の ‘-ㄴ디라’ および ‘-ㄴ디라’ には、接続形の用法と終止形の用法がそれぞれに存在する。さらに、近世朝鮮語では中期朝鮮語に比べて ‘-ㄴ디라’ の出現頻度が高くなる傾向が見られる。本発表では、まず、辞書類や鄭在永 (1996)、이지영 (2008)、朴鎭浩 (2013) などの記述を概観し、中期朝鮮語および近世朝鮮語の ‘-ㄴ디라’ および ‘-ㄴ디라’ の形態的特徴について述べる。次に、中期朝鮮語と近世朝鮮語における出現頻度の違いを指摘し、‘-ㄴ디라’ および ‘-ㄴ디라’ の具体的な用法を記述する。さらに、『楞嚴經』や『法華經』の諺解に出てくる ‘-ㄴ디라’ と、それらに対応する箇所に入力された口訣を比較する。

【参考文献】

河野六郎 (1979a) 『河野六郎著作集 1 朝鮮語学論文集』 平凡社

河野六郎 (1979b) 「朝鮮語」 (河野 1979 a 所収)

朴鎭浩 (2013) 「日本語の「ノダ」文と韓国語の「것이다」構文をめぐって」, 『2012 年度 東京大学コリア・コロキウム 講演記録』 東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室

이지영 (2008) “-은지” 와 “-을지” 의 통시적 변화”, “국어학” 53, 국어학회

鄭在永 (1996) “依存名詞 ‘ㄴ’ 의 문법화”, 國語學會

(1) 朝鮮語の時代区分と名称は河野 (1979b: 67) にしたがう。本発表では現代朝鮮語の場合に ‘-ㄴ지라’ および ‘-ㄴ지라’ を用い、近世朝鮮語と中期朝鮮語の場合には ‘-ㄴ디라’ および ‘-ㄴ디라’ を用いる。中期朝鮮語の ‘-ㄴ디라’ および ‘-ㄴ디라’ は接辞 ‘-오/우-’ を伴うので、‘-온디라’ のように表すべきかもしれないが、近世朝鮮語および現代朝鮮語の場合も合わせて扱うため、便宜上 ‘-ㄴ디라’、‘-ㄴ디라’ のように書くことにする。

9. 『捷解新語』における아 / 어形節および아서 / 어서形節の複文構文の一考察

早稲田大学 崔 チョンア

現代朝鮮語における아 / 어形節の複文構文の研究は、形態素서의省略形とされ、特に意味用法の研究では아서 / 어서形節の複文構文と同様に扱われている。他方、言語変化の過渡期と言われる近代朝鮮語では、아 / 어形節を主として、形態素서는서의形で아서 / 어서形節が現れ、その上、現代朝鮮語とは異なる特徴を持っている。

本発表では、17世紀に朝鮮で日本語の教科書として作られた捷解新語を用い、아 / 어形節および아서 / 어서形節の複文構文について考察を行うことにする。そして今後、近代から現代まで至る아서 / 어서形節の複文構文の通時的変化を明示的に示すことを本研究の目的としている。

捷解新語は、(a) 通常の言語向けの教科書とは異なり、物語性を持っており、(b) 当時の表現が反映された口語体である。さらに、(c) 数回の改修が行われているため、17世紀から18世紀までの近代朝鮮語の言語変化を垣間見ることができる（本発表では、原刊本(1676)、改修一次本(1748)、改修重刊本(1782)を分析対象とする）。

よって、近代朝鮮語の文献のうち、本研究の対象とする様々な아 / 어形節および아서 / 어서形節の複文構文の出現率が高いと考えられる。

(1) 게서 힘 써 이런 道理를 東萊의 옛조와 닮아 브디 홀 양으로 흠습소 (原刊 1,32)

(そこできもいてこのような道理を東萊へ申してあすぜひともさしらるやうにさしられ)

(2) 무척 오리셔 흘리나 쉬시고 비들토 도로시과다 헝시덩이다 (原刊 5,17)

((貴様が) おかへあがらしられていちにちもおくつるぎなられて船をもまわしられかな)

(3) 아직 가셔 太守 니르시느 道理 극진히 옛조와 보오리 (原刊 5,26)

((私が) まずまいて太守をしられる通りねんごろに申してみませう)

本研究では、捷解新語の対話が表れる巻1～巻9の中から、아 / 어形節および아서 / 어서形節の複文構文を抽出し((1)が前者で(2)(3)が後者の例文)、統語論的観点と認知言語学的観点からその分析を行った。さらに、서形節の複文構文の中、現代朝鮮語の아서 / 어서形節の複文構文で見られる形態素서と同様の位置づけと言える形態素서による複文構文を取り出した((3)の例文)。そして最後に、Aitchison(1981)による言語変化のS字カーブ説を援用し、今回の分析結果による形態素서의分布に基づき、아서 / 어서形節の複文構文における言語変化について考察を行う。

Aitchison(1981) *Language change: progress or decay?* / 崔 (2018) 「韓国語の「- 어서」・「- 고」形節の意味類型と統語構造」 / 福井玲 (2014) 「捷解新語初刊本のテキスト分析」 / 국립국어연구원 (1997) ” 국어 시대별 변천연구 2 —근대국어—” / 고영근 (2010) ” 제 3 판 표준 중세국어문법론” / 서울대학교奎章閣韓國語学研究院 (2007) ” 捷解新語” /

10. 『三綱行實圖』、『續三綱行實圖』、『二倫行實圖』に 共通してみられる刻手名について

東北大学 澁谷 秋

『三綱行實圖』は世宗の命により庶民の教化を目的として作られ、朝鮮および中国の歴代文献から孝子、忠臣、烈女の事績が秀でた人を選び表面に絵を描き、裏面に漢文で説明および詩、賛を付けた後、欄上部分に諺解を加えたものである。1434(世宗 16)年に漢文からなるいわゆる「世宗初刊三綱行實圖」が刊行され、以降この版に諺解が付されたいわゆる「諺解三綱行實圖」が朝鮮時代 400 年にわたり改刊、重刊される。『續三綱行實圖』はその名の通り『三綱行實圖』の続編として編まれたもので、3 巻 1 冊の木版本である。『二倫行實圖』は 1518 年に刊行されたと考えられる木版本で、金安國が曹伸に慶尚道金山郡で撰集させた本である。

『三綱行實圖』の原刊本は 1490 年に刊行されたと考えられるが現存しない。一度目の重刊本は現伝する刊本にある墨書の内容から 1579 年、二度目の重刊本は刊記から 1726 年に初刊本が刊行されたことが分かっている。

『續三綱行實圖』の原刊本は序文の内容から 1514 年に刊行されたことがわかるが、原刊本は現在伝わらない。一度目の重刊本は 1560 年以降 1581 年以前に、二度目の重刊本は刊記から 1727 年に初刊本が刊行されたと考えられる。

『二倫行實圖』は玉山書院本が原刊本と考えられるほか、一度目の重刊本は内賜記から 1579 年に、二度目の重刊本は刊記から 1727 年に刊行されたと考えられている。

『三綱行實圖』と『續三綱行實圖』、『二倫行實圖』はいずれも原刊本刊行後二度重刊されるが、複数種の刊本が現伝し、その系統図は複雑である。しかしながら刊行に関する情報が伝わらないため、刊行された場所や刊行年については不明点が多く残されている。さらに、重刊に際して『三綱行實圖』は『續三綱行實圖』あるいは『二倫行實圖』と対になって刊行されていた記録がある。しかしながら内賜記等の刊行に関する情報は 1 冊目にだけ記載されるため、対になって刊行された場合 2 冊目以降には刊記がつけられないのが普通である。このように刊行に関する情報が残されていない朝鮮本の刊行年や刊行地の推定には、刻手名が有効であることは藤本幸夫(2001,2006,2018)などですでに指摘されている。

刻手名に注目して発表者が調査を行った結果、『三綱行實圖』と『續三綱行實圖』および『二倫行實圖』に共通してみられる刻手名があることがわかった。各文献に残された刻手名が複数種一致する点から、これらは同時期に近い場所で刊行された関係性であると考えられる。

加えて、刻手名が黒口部分に刻まれる場合、刻手名と魚尾の種類が連動する例が多くみられた。これは刻手名だけでなく黒口と魚尾を含めた版心全体が刊行情報の推定に寄与しうるものであることを示唆する結果である。複数の文献に共通する刻手名が確認されたことにより、これらの刊行地および刊行年代を限定するとともに、朝鮮時代の刻手と出版事業の関係性を考える上の糸口を提示する。

11. 延辺朝鮮語の1音節語幹用言のアクセントの変化に関する研究

東京大学(研) 國 分 翼

延辺朝鮮語は朝鮮語東北方言を基層とした変種であり、アクセントの対立が存在し、その体系が中期朝鮮語に対応していることはよく知られている。しかし最近では、アクセントの合流により古い体系が崩壊しつつある。発表者は一昨年及び昨年の朝鮮学会大会において、1～4音節までの名詞のアクセントの変化について検討し、特に1音節名詞、2音節名詞において、音節量や分節音との関係性により、アクセントの合流や保存に傾向がみられることを指摘した。名詞で一定の傾向がみられる一方、用言のアクセントの変化にはどのような傾向がみられるのだろうか。本発表ではこれについて、1音節語幹用言を対象を限定して考察する。

延辺朝鮮語のアクセントに関する研究はこれまでも数多く存在するが、その多くは名詞のアクセントに関する研究であり、用言のアクセントを扱ったものは数える程度しか存在しない。このうち、Ito(2016)では、延辺朝鮮語の用言のアクセントは中期朝鮮語と同様に、分節音(segment)と強い相関を見せるが、延辺朝鮮語での分節音の統合により、中期朝鮮語において元来存在していたアクセントクラスと分節音の関連性が部分的に曖昧になっているとしている。また、고쿠분(2021)は1音節語幹用言のアクセントのうち、L2タイプ、即ち Ramsey(1991)の中期朝鮮語のアクセントクラスにおいて Class3、Class4として分類された語について、基本的には中期朝鮮語の -ㅓ-, -(으/으)시-, -을-, -아/어に由来する語尾が結合するときには語幹にアクセントが置かれるが、話者によってアクセントの現れ方が異なり、それ以外の語尾が結合する場合にも語幹にアクセントが置かれるものが見られたとしている。また、理由を表す ‘-(으)니’ が結合するとき、語頭アクセントで現れた例が非常に多く現れたとしている。この語尾の結合におけるアクセント交替については、疑問終結語尾の ‘-니’ との混同により、最近になって新しく生じた変化であると推定している。このように、延辺朝鮮語の用言アクセントは中期朝鮮語の用言のアクセント体系を基本的には受け継ぎつつも、音韻論的な理由と形態論的な理由の両方の影響により、徐々に変化しつつあるということがわかる。本発表では先行研究で確認されている変化について再確認するとともに、先行研究で言及のない変化についても音韻論的な理由、形態論的な理由の双方から捉え、アクセント体系の変化の傾向について検討する。

【参考文献】

- Ito, C.(2016) “Analogical change of accent in verbal inflection of Yanbian Korean” *Lingua*, 183, pp.34-52.
- Ramsey, S.R.(1991) “Proto-Korean and the origin of Korean accent” *Studies in the Historical Phonology of Asian Languages*, John Benjamins Publishing Company, pp.215-238.
- 고쿠분 쓰바사 (2021) 「연변조선어 젊은층 화자의 용언 악센트에 대한 연구」 『방언학』 33, 한국방언학회, pp.1-34.

12. 韓国語慶尚道方言の語頭閉鎖音の知覚における世代差の研究

龍谷大学 徐 旼 廷

韓国語の閉鎖音の平音、激音、濃音は、語頭の位置では全て無声音として実現されるが、VOT と後続母音の F0 のような音響特徴によって区別されることが知られている。しかし、Silva(2006) などの研究によって、ソウル方言において、若い世代では平音と激音の VOT の長さが合流し、VOT が平音と激音の区別の機能を失ったことが明らかになった。さらに、ソウル方言の平音と激音の知覚にも世代差があることが報告された。Kang, Kyung-Ho(2010) などによると、古い世代に比べ若い世代は閉鎖音の知覚において F0 をより使う。

一方、高さアクセントを有する慶尚道方言の閉鎖音においても、近年の研究によってソウル方言と類似した音響特徴の変化があることが明らかになった。Lee and Jongman(2018)、徐旼廷(2022) などによると、ソウル方言と同様に、慶尚道方言でも世代が若くなるほど平音と激音の VOT が接近する変化が見られる。しかし、慶尚道方言の閉鎖音の知覚に関する研究は数多くない。

本研究は、韓国語慶尚道方言の語頭閉鎖音の知覚における世代差について論じることを目的とする。研究対象は、慶尚方言話者の 60 代以上、40 代、10 代の 3 世代である。VOT と F0 を操作した合成音声を用いて知覚実験を実施し、VOT と F0 が閉鎖音の知覚判断の手がかりとして使われる様相を考察した。研究の結果、閉鎖音の知覚様相が世代によって異なることが明らかになった。この結果から、慶尚道方言の閉鎖音の知覚においても世代による変化があると言える。

【参考文献】

- Kang, Kyung-Ho(2010) “Generational differences in the perception of Korean stops” , *Phonetics and Speech Sciences* 2-3.
- Lee and Jongman(2018) “Effects of sound change on the weighting of acoustic cues to the three-way laryngeal stop contrast in Korean: Diachronic and dialectal comparisons” , *Language and Speech* 62-3.
- Silva(2006) “Acoustic evidence for the emergence of tonal contrast in contemporary Korean” , *Phonology* 23.
- 徐旼廷 (2022) 『韓国語大邱方言のアクセントの音声的实现様相における世代差に関する研究—語頭閉鎖音の音響特徴との関わりを中心に—』、東京大学博士論文。

1. 3冊の『歌集』 —祖国解放戦争時、人民軍は何を歌ったか—

早稲田大学 布袋 敏 博

祖国解放戦争（朝鮮戦争）時に朝鮮民主主義共和国で刊行された作品集には、『小説集 英雄たちの戦闘記（소설집 영웅들의 전투기）』（1）（2）といった小説集、林和の『お前はどこにいるのか（너 어느 곳에 있느냐）』や金朝奎の『この者たちの中で（이 사람들 속에서）』、閔丙均の『故郷（고향）』、金常午の『憎悪の炎（증오의 불길）』、安龍灣の『私の軽機関銃（나의 따발총）』、李炳哲の『栄誉の隊列で（영예의 대열에서）』といった個人詩集、『勝利はわれらに（승리는 우리에게）』等の総合詩集、そして金史良の『海が見える（바다가 보인다）』のようなルポルタージュ集があることが知られている。

そうした中で、これらのジャンルとはまた異なる作品集がある。歌集である。歌集といっても、この言葉を聞いて思い浮かべるであろう日本の歌集とはまた異なる。花鳥風月や恋愛感情を歌ったものでなく、軍歌集である。つぎの3冊である。

- ①『人民軍軍歌集（인민군군가집）』第1集（朝鮮人民軍前線司令部文化訓練局）
- ②『人民軍軍歌集（인민군군가집）』第2集（同上）
- ③『戦闘員たちに与えるノレ（歌）集（전투원들에게 주는 노래집）（1）』（朝鮮人民軍総政治局，1951.6）

これらのうち、③は表紙に「1951.6」と印刷されているので、発行年月を確認できるが、①と②については、何も表示はなく、奥付もないので、発行年次を確認できず、戦時のものであるかについては検討が必要である。ただ内容などから、3冊のうちでは①と②が早く発行され、③がそれに続くものと思われる。いずれも楽譜付きで、①と②はどちらも本文26頁、③は本文34頁の薄い冊子である。

③には、「インターナショナル」など全15曲が収録されており、朝鮮人の作詞・作曲は8曲、ロシア人の作曲家によるものは5曲、作詞・作曲者名不明が1曲、それに「インターナショナル」である。この中には、李燦作詞、金元均作曲の「金日成将軍の歌」や、林和作詞、金順男作曲の「タンク兵の歌」などよく知られた歌も含まれている。

一方、①と②はいずれも13曲ずつで、どちらもすべて朝鮮人の作詞・作曲による。

これら3冊に収録された作曲家は、金順男（김순남）、金玉成（김옥성）、金元均（김원균）、李冕相（리면상）、李健雨（리건우）、パク・ジョングァン（박종관）、ユン・スンジン（윤승진）、チョン・ジノク（정진옥）、韓時炯（한시형）の9名で、このうちもっとも多く作曲しているのは金玉成で9曲、ついで金順男が8曲、そしてチョン・ジノクが7曲となっており、この3人で33曲中の24曲を作曲している。

これに対し、作詞家は20名におよび、林和、李燦、閔丙均、朴世永、安龍灣、趙靈出など名の通った詩人たちも含まれている。

同じ時期、南の大韓民国で刊行された作品集、資料類については、『韓国戦争期 文学／手記／制度 資料集（한국전쟁기 문학／수기／제도 자료집）』（全18巻、ソミョン出版社、ソウル、2009年12月15日）が出版されており、基本的な文献は大体揃っている。しかし、北の共和国については、どれだけの作品が発表されたのか、といったこともまだはっきりとは確認できていない。

そうした空白を埋める基礎作業の一環として、今回3種の『歌集』を取り上げ、これらの中で何が歌われているのかなど検討してみたい。

2. 金史良の全集未収録作品「凧とボットリ」について

埼玉大学 柳 川 陽 介

本発表では、全集未収録である金史良の日本語作品「凧とボットリ」(1942)の内容と特徴について紹介する。金史良の作品は、主に河出書房新社から刊行された『金史良全集』(1973～1974)と、韓国のソミョン出版から刊行された『金史良、作品と研究(김사량, 작품과 연구)』(2008～2016)に収録されている。ただ、とりわけ日本語で発表された金史良の作品の場合、小説「虎の髭」や随筆「朝鮮の女」など、研究が進むにつれ新たに発見されたものも少なくない。本発表で取り上げる「凧とボットリ」もその一つであり、従来の研究では見落とされていた作品である。

「凧とボットリ」は平壤の大同江を舞台に、凧合戦が行われる様子と、川に落ちた凧をひろう少年を描いた作品である。凧を拾うことに専念するあまり、川でおぼれた少年のボットリを、仲間たちが救う過程が物語の軸となる。金史良は日本語作品である「ムルオリ島」や「故郷を想ふ」などで、朝鮮の空や大同江の自然を描いているが、「凧とボットリ」においても水上船をはじめ自身の故郷である平壤が背景として登場する。凧合戦に関する表現として「少年兵」、「空中乱戦」、「墜落機」など戦争を彷彿させる用語が用いられているが、全体的にみれば戦時中であることをさほど意識させない内容となっている。

本発表では「凧とボットリ」の書誌、内容と特徴に加え、金史良の文学世界における位置づけ、植民地期から解放直後における朝鮮文学と凧合戦の関係、そして日本文学における朝鮮凧の描写に着目する。とくに金史良の文学世界における位置づけについては、平壤という空間に加え、鍾に由来するボットリという名付け方に注目したい。比較対象として検討している作品は、玄在徳「凧揚げ(연날리기)」(1939)と金耀燮「凧(연)」(1948)であり、いずれも朝鮮語で発表された児童文学作品である。湯浅克衛や旗田巍、森敦をはじめ幼少期を朝鮮で過ごしたいわゆる在朝日本人の回想には、凧揚げの記憶が登場する。なかでも小説家の森敦は回想のほかに、短篇「天上の眺め」(1974)のなかで朝鮮凧を取り上げている。凧の作り方と遊び方が具体的に描かれている点で「天上の眺め」は注目される。本発表では、こうした朝鮮凧を取り上げた諸テキストも念頭に置き、「凧とボットリ」の内容と特徴を紹介する。

【参考文献】

곽형덕, 『김사량과 일제 말 식민지문학』 소명출판, 2017년.

김재용・곽형덕 편역, 『김사량, 작품과 연구』 1-5, 소명출판, 2008-2016년.

야나가와 요스케, 「김사량의 일본어 수필 「조선 여자(朝鮮の女)」」 『구보학보』 23, 구보학 회, 2019년.

布袋敏博「普通江改修工事完遂を祝う文学作品—金史良の新発掘資料を中心に」『社会科学』54巻2号、同志社大学人文科学研究所、2024年

3. 金裕貞小説における土着性と翻訳可能性 ：「春・春」を手がかりに

東京大学 相 川 拓 也

金裕貞（1908～1937）は従来より、作家の故地である江原道を連想させる農村を背景とした一連の作品において、郷土としての朝鮮農村の自然や、そこで愚直に生きる人々の姿を、口承的な語りによってユーモラスに描いた作家であると評価されてきた。しかし、特に 2000 年代以降の韓国での文学研究の進展を反映して、金裕貞の文学に関するこのような定型化したイメージに対する再検討が進められてきている。とりわけ、朝鮮農村の純真さなどの側面を強調する定型化した金裕貞理解の枠組みを厳しく批判し、金裕貞小説の実験性を強調した崔元植の議論をはじめとして、文体論や言語論、ジェンダー批評、メディア論、検閲研究といった多様な観点から金裕貞の文学テクストの見直しが現在まで活発に続けられている。それらの成果によって、口語、方言、卑語を多用した金裕貞の文体や、作中での農村表象が持つ歴史性などが明らかにされている。

日本への金裕貞の本格的な紹介は、1984 年の岩波文庫『朝鮮短篇小説選』で代表作の「봄・봄」と「동백꽃」が、長璋吉によりそれぞれ「春・春」、「椿の花」として翻訳されたのが最初であると言える。同書で金裕貞は「土着の淳朴でユーモラスな人物像を創造」した作家として紹介されており、当時の韓国での通説的な評価と通じる。近年では、朴鍾祐と石塚由佳により金裕貞小説の翻訳紹介が続いていることが注目されるものの、韓国での新しい研究動向を踏まえた本格的な議論は、まだなされていないのが現状である。

本発表ではこうした問題意識から、代表作「春・春」を手がかりとしながら、作品の再読をおこなうとともに、日本語によって金裕貞をどのように翻訳し、受容のあり方を更新することができるのか、という問いを提示する。まず、金裕貞文学の土着性を特徴づけるとされる叙事の口承性に関連して、「春・春」のテクストを対象に、語彙、文末表現、綴字や文章符号といったレベルでの分析を通じて、口承性を構成する要素について具体的に明らかにする。そのうえで、複数の日本語既訳を原文と比較検討しながら、金裕貞特有の文体が翻訳される様相についても確認する。最後に、「春・春」が口承的な叙事によって土着性や諧謔味を演出しつつ、植民地農村における不条理性を描いたことを仮説的に提示したうえで、金裕貞小説が持ちえた同時代的な意味とともに、その日本語への翻訳可能性について考えたいと思う。

【参考文献】

- 大村益夫、長璋吉、三枝壽勝編訳『朝鮮短篇小説選』上下、岩波書店、1984 年。
朴鍾祐、石塚由佳「金裕貞文学の翻訳 VI：「春・春」、「椿の花」」『海港都市研究』19、2024 年。
최원식「모더니즘 시대의 이야기꾼：김유정의 재발견을 위하여」『민족문학사연구』43、2010 年。

4. 『アンネの日記』と翻訳の位置 —東アジアにおける日記を書く少女の肖像と歴史的記憶—

成均館大学校 朴 珍 英

1947年にオランダ語で初めて出版された『アンネの日記』は、1960年までに約20ヶ国語に翻訳され、世界各国で広く読まれたベストセラーである。その中で、非ヨーロッパ語としては非常に早い時期に日本語と韓国語に翻訳され、今日まで両国で愛読されている。日本と韓国における『アンネの日記』への反応は異例なほど強烈で、最も重要かつユニークな事例の一つである。一方、台湾、ベトナム、中国では1970～80年代に遅れて翻訳され、読書および受容の視点も大きく異なっていた。韓国版『アンネの日記』は1954年に日本版から重訳されたが、東アジアにおける冷戦期の文化的感覚だけでなく、グローバルな翻訳と受容の歴史においても問題的位置を占めている。

『アンネの日記』は、第二次世界大戦に関する生きた証言であり、私的な記録であると同時に、原著者の生前および死後にかけて編集され、部分的に彩色されたノンフィクション文学でもある。このテキストは、1952年にエリナー・ルーズベルトの序文を含むアメリカ版の出版を契機に、大衆的に大きく注目されるようになった。アメリカ版は、アンネ・フランクが生前に自らつけた原題「後ろの家」とは異なり、「幼い少女の日記」というタイトルで出版された。日本版はGHQ統治終了の同年末に「光ほのかに」、それから韓国版は朝鮮戦争の休戦直後の1954年に「星は窓ごし」という文学的かつ叙情的なタイトルに改められた。アメリカ版、日本版、韓国版の連鎖的な翻訳は、ユダヤ人とホロコーストをめぐる苦痛な記憶や歴史的傷痕を緩和する代わりに、少女の感受性や性的好奇心に焦点を移した。このような翻訳の様相が持つ問題点は、1960年以前の東欧圏および西欧圏における翻訳過程と序文の系譜からも確認できる。

一方、『アンネの日記』は1950年代末にブロードウェイの演劇とハリウッド映画の興行的成功を通じて、その大衆的な影響力が世界的に拡大された。アメリカ版の演劇と映画は、特殊な状況下における家族間の葛藤に焦点を当て、思春期の少女が初めて経験する恋愛や愛の感情、さらには月経や性的欲望に対する率直な告白を浮き彫りにすることで、日記に内包された政治的・歴史的記憶を変容させた。韓国版『アンネの日記』は、女性翻訳家の兪孝淑によって初めて翻訳されたが、西ドイツに留学していた専門翻訳家の田恵麟が、アンネの一代記を扱ったルポ『アンネ・フランク』と米国劇『アンネの日記』を相次いで翻訳することで、重要な契機を提供した。『アンネの日記』は、戦後の韓国において「日記を書く少女」の発見とブームを巻き起こしただけでなく、女性翻訳家の登場という決定的な転換点ともなった。

トランスナショナルな翻訳によって可能となった『アンネの日記』のドラマチックな旅路は、冷戦の時代、東西の両陣営、さらに成人男性と若い女性という世代やジェンダーを横断して展開された点で、トランス・リライティングのプロセスをよく示している。特に韓国版は、ファシズムとホロコースト対ヒューマニズムと少女の成長という緊張関係の中で、翻訳の位置と効果を問題的方法で明らかにした点において重要である。

5. 「マッチ売りの少女」 翻訳の植民地的無意識

成均館大学校（院） 李 麗 珍

アンデルセンの「マッチ売りの少女」は特別な教訓なしに虐待、貧民、疎外の現実を幼い子供を中心にして話す童話だ。それにもかかわらず「マッチ売りの少女」は近代朝鮮で1915年を基点に1936年まで新聞、雑誌、選集など多様なメディアを通じて数回翻訳された。主な翻訳家としてはチェ・ナムソン、オ・チョンソク、パン・ジョンファン、コ・ジャンファン、イ・ジョンホ、チョン・ヨンテクがいる。「マッチ売りの少女」の翻訳は、韓国児童文学の活発な展開が行われた時期に行われたという点で、この翻訳が持つ意味をそれぞれの脈絡の中で再考してみる必要がある。したがってこの研究では「マッチ売りの少女」が多様なメディアと翻訳家によって収容された方式を分析、脈絡化し「マッチ売りの少女」という作品が近代朝鮮で持つことになる新しい意味を把握する。

当時、朝鮮ではその他の西洋文学の受容方式のように児童文学も日本語の重役を通じて紹介された。そのため、韓国語と日本語の翻訳を交差して見ながら議論する必要がある。アンデルセンの「マッチ売りの少女」は日本で1886年、韓国で1915年に翻訳される。アンデルセンの童話が初めて翻訳された時が日本が1886年、韓国が1914年だということを勘案すれば、「マッチ売りの少女」はアンデルセンの童話の中でも両国で早く翻訳されているということが確認できる。

「マッチ売りの少女」の日本語と韓国語訳ではそれぞれの翻訳本によって細部的な設定で少しずつ違いを見せる。時間の背景を説明するものとしては、クリスマス、大晦日、聖シルベスターが登場する。また、少女の靴を奪う少年の描写は追加されたり削除されたりする。少女の涙と天国に対する叙述、母親の存在ユミュもまた翻訳本によって変形される。また、少女が死んだ後に登場する他人の関心と視線は、変訳本によって解説的であったり感情的だ。例えば、富山房で出版された『アンデルセン御伽噺』の「マッチ売の娘」(1917)では少年の台詞が全て削除され、少女は靴は泥だらけになったと描写される。また「死んだ」母親という説明を追加して少女の環境を説明する。一方、同じ挿絵が載せられたオ・チョンソクの「マッチ売り少女」翻訳(『学生系』5号、1920)では少女の靴を奪っていく少年の台詞が現れ、母親の死を直接的に叙述しない。このような細部的な叙述と焦点の変化は植民地朝鮮で暴力と略奪、欠乏と抑圧、慰労と救援、孤立と疎外などと解釈できる余地がある。

「マッチ売りの少女」は短い話の中で社会問題と同情、憐憫、幻想を同時に見せることができる新しい童話形式の登場であり提示だった。同時に翻訳家の無意識によって細部的な変化が発生し、テキストは新しい象徴と解釈の可能性を獲得した。このような過程を通じてアンデルセンの「マッチ売りの少女」は近代朝鮮の児童文学展開過程の中で一つの近代童話モデルとして定着することになった。

6. 貞一軒の周辺人物と詩作背景

近畿大学 山田 恭子

南貞一軒（一八四〇～一九二二）は幼い頃から祖父の南永周（一七八八～一八五六）から漢字を学び、一八五五年に成大鎬（一八三九～一八五九）と結婚したが、一八五九年に夫が病死してしまうという不幸に見舞われた。後追い自殺を試みるものの、義母に止められ、その後はひたすら夫なき家を支えながら生きていく。一八七〇年には、親戚の成台永（一八六二～一九三四）を養子に迎え、実子の如く大切に育てていく一方で、舅の還暦祝いには漢詩を贈っている。そして才能豊かな貞一軒の漢詩は、後に成台永らによって編集され『貞一軒詩集』（一九二三）として刊行されるのである。

しかし、その家族や詩作背景については、まだ十分言及されたとは言えない。

そこで本発表では『貞一軒詩集』序文である李健昌（一八五二～一八九八）の「貞一軒詩藁序」を参照しながら、貞一軒の周辺人物と詩作背景について考察する。

貞一軒は宜寧南氏、その始祖は唐からの帰化人であるが、朝鮮時代には開国功臣の家門として知られ、一族は都に居住地を持っていた。とりわけ有名なのが少論系リーダーの南九萬（一六二九～一七一）であり、その末裔から文化人が輩出された。南九萬の五代孫で長編小説『玉樓夢』の作者南永魯（一八一〇～一八五七）、花蝶画で有名な南啓宇（一八一〇～一八九〇）らはその代表で、貞一軒は南九萬の七代孫に当たる。したがって、貞一軒は極めて文化教養に恵まれた家系で育っており、女子であっても作詩できるほどの環境にあった。

一方で、夫の成大鎬は昌寧成氏、孔子と共に祀られた東国十八賢の一人である成渾（一五三五～一五九八）の末裔である。成渾は母の坡平尹氏の実家である現在の京畿道坡州市牛溪邑で暮らしてきた。成渾は李珥と仲が良く、李珥の編纂した『小学集註』の解釈で共に討論をした。また理気の解釈について、李珥の説には納得せず、李滉の影響を受けていたが、朱子学の実践では、李珥を感嘆させる程の人物であった。子弟には老論、少論の両方の人物がいる。老論の始祖の宋時烈（一六三三～一六八九）の師であった金集（一五七四～一六五六）と、宋時烈と距離をおいた少論の始祖の尹拯（一六二九～一七一四）の祖父で、成渾の婿でもあった尹滉（一五七一～一六三九）がそれに当たる。

したがって、貞一軒は両家族から文学的・経学的素養を受け継いだ人物であった。遺品には『小学集註』のハングル本もあり、その漢詩が道心に基づく「性命の正」と賞賛されたのも、両家からの影響が深かったといえよう。また当時の女性は自作の漢詩を外に洩らさなかったが、貞一軒は李健昌の母である坡平尹氏に披露し、母と呼ぶほど師事していたことから、姻戚関係の女性を通じた文学ネットワークが存在したことを物語っている。

1. 朝鮮放鷹文化における書物の役割 —『鷹鵄方』諸本の本文の検討から—

長野県立大学 二本松 泰子

高麗時代末期～李王朝時代の朝鮮半島では、鷹狩りに関する伝書（鷹書）が複数制作された。そのうち、現在、内容の確認が可能なテキストは以下の三書である。

- ① 李兆年編とされる『高麗古本鷹鵄方』（14世紀成立）。
- ② 李瑑編とされる『古本鷹鵄方』（15世紀成立）。
- ③ 李燭編とされる『新增鷹鵄方』（16世紀成立）。

いずれも『鷹鵄方』を称する書名で、鷹の様相に関する用語や鷹の飼育法・傷病の療治法および鷹賦・鷹詞の言説や情報が掲載されたテキストである。このうち、朝鮮書（写本）の現存が確認できるのは①のみである。また、③については江戸時代を通して日本国内で多数の伝本が流布した。特に、江戸幕府第八代将軍・徳川吉宗の治世においては、彼の朝鮮薬材調査政策の影響もあり、多くの版本や国字解が制作された。このような背景から、従来の研究では、これらの『鷹鵄方』群を医薬書（獣医書）として位置づける傾向が強かった。

本発表では、これらのテキストに魏澹の鷹賦が引用される点に注目したい。というのも、魏澹の鷹賦は、日本国内に流布した『新修鷹経』にも引用されているのである。中世～近世に膨大な数が制作された日本の鷹書群の中で、魏澹の鷹賦に触れたテキストは極めて少ない。この『新修鷹経』は、『日本国見在書目録』に書名が見えることから、かつては漢籍と見なされていたが、国外に伝本が存在しないことから、現在では“和製の鷹書”と認定されている。しかも、上記①～③のテキストの成立時とほぼ重なる時代に日本で広く受容されていたことを踏まえると、この『新修鷹経』は、上記①～③の記述内容にアプローチする手がかりとして有用なテキストと言えよう。

ところで、『日本書紀』仁徳天皇43年（355）9月条によると、百済の王族が日本の天皇に鷹狩り用の鷹を献上し、百舌鳥野で日本初の鷹狩りが実施されたという。このように、日本の放鷹文化は、朝鮮半島のそれと遡源的な部分で分かちがたく繋がっている（強い影響を受けている）ものの、その具体的な実相はいまだ十分に解明されていない。主な要因としては、朝鮮側の一次的な記録が不足していることや、現代の韓国社会に伝統的な鷹狩り文化がほとんど伝わっていない状況などが挙げられよう。一方、①～③の『鷹鵄方』諸本を文学的視座と手法から読み解くならば、そういった情報を補填する書物になり得るのではないかと想定する。

そこで、本発表では、①～③の『鷹鵄方』諸本について、『新修鷹経』との比較検討を試みる。それによって、これらのテキストが単なる医薬書（獣医書）ではなく、朝鮮放鷹文化を記述・伝播する媒体であった可能性を提示したい。さらにはこの成果を以て、14世紀～16世紀の朝鮮半島には、このような書物を介する放鷹文化が展開していたことも併せて指摘しておきたい。

2. 朝鮮中宗代～明宗代における王朝政府の尼僧管理をめぐる論議

九州大学(講) 押 川 信 久

朝鮮王朝政府は、建国以来、基本的に尼僧を、身寄りのない寡婦を救済し、王室内での仏事を担うための存在と位置づけ、限定した尼院に所属させ、管理する施策を推進していた。ところが、燕山君 10 年(1504)の甲子士禍の勃発を契機に、後宮で剃髪して尼僧になった者が強制的に還俗させられ、浄業院などの尼院が撤去された。これらの措置により、王朝政府の尼僧管理の枠組みは、大きな打撃を受けることになった。

しかし、甲子士禍を経てからも、王朝政府内部では、尼僧の行状をめぐり、論議が継続されていた。さらに、1506 年に、反正によって中宗が即位すると、尼僧管理のあり方をめぐる論議も、王朝政府内部で再びみられるようになる。そこで、本発表では、中宗代から明宗代にかけて、王朝政府内部でたまたまかわされた、尼僧管理に関する論議の内容を分析し、王朝政府が尼僧管理の枠組みを再構築していく過程を検証することに主眼をおく。

尼僧は、甲子士禍や中宗反正を経た後も、生活の糧を得るために、王都の城内および宮中を出入し、先王の後宮の居処である宮家での仏事の開催に携わっていた。臣下や儒生は、こうした尼僧の行状を、世間を惑わし、城内の風紀・治安を乱す行為とみなして、尼僧を城外に追放するよう求める上疏を相次いで提出した。

一方、国王である中宗・仁宗は、王妃・大妃をはじめ、王室の婦女が仏事を開催する場合には、これに関知せずに黙認する態度をとっていた。また、明宗は、生母である文定王後の垂簾聴政の下で即位し、親政を行ってからも文定王後の影響から離れることはなかった。結局、中宗・仁宗・明宗は、一連の論議において、おおむね王室の婦女の意向を汲み、臣下や儒生の反対意見に裁可を与えることは稀であった。

王朝政府内部での論議の推移を背景に、後宮は、中宗が即位した直後より、甲子士禍の勃発によって打撃を受けていた宮家の機能を回復させ、尼僧を宮家に迎えて、積極的に仏事を開催した。さらに、明宗が即位して、文定王後の垂簾聴政がはじまると、宮家であった慈寿宮に鐘樓・羅漢殿を設置し、同じく宮家であった仁寿宮を修理する際に、建国以来の代表的な尼院であった浄業院を仁寿宮に所属させる措置がとられた。これらの措置により、宮家に尼院としての機能が付加され、宮家で仏事を開催する環境が整備されることになった。

以上より、王朝政府は、甲子士禍や中宗反正を経てからも、尼僧と後宮の紐帯が継続されるなかで、宮家に尼院の機能を付加することで、結果として尼僧の動向を把握する手がかりを得ることが可能になったといえよう。

3. 沙也可（金忠善）と沙汝某（金誠仁） —壬辰戦争後の朝鮮社会における降倭たちの存在様態と相互ネットワーク—

天理大学 長 森 美 信

壬辰戦争（壬辰・丁酉倭乱、文禄・慶長役）に際して、朝鮮や明に投降した日本将兵は、降倭、投降倭、帰順倭、順倭、帰附倭人、倭中出来人、敵中降附人、逃倭、流離人、投順倭等と呼ばれた。本報告では便宜的にこれを「降倭」と総称する。

これまで壬辰戦争期の降倭については、戦乱中にどのような人物が投降したのか、彼らが投降した理由、彼らが果たした役割、彼らに対する朝鮮政府の処遇や待遇等に主たる関心をおいて研究が蓄積されてきた。一方、戦後の降倭たちが置かれた環境や暮らしなど、彼らの朝鮮定住の様態に関する研究は低調であった。その背景には史料制約がある。降倭とその子孫の多くは、戦後の朝鮮社会において名もない一般民衆として世代を重ねていった。そのような彼らに関する記録が残ること自体が稀であり、仮に存在したとしても断片的である。そうしたなかで近年、戸籍資料を活用して、朝鮮社会における降倭の存在様相や、彼らの定着様相を探ろうとする研究も進められている。

降倭のうち最も著名なのは「沙也可」こと、金忠善（1571～1642）であろう。金忠善が壬辰戦争中に多数の配下を率いて朝鮮に投降した「倭将」であったこと、その子孫たちが今も大邱広域市の友鹿里に代々暮らしてきたことはよく知られている。

本発表では、金忠善とともに朝鮮に投降した「沙汝某」こと、金誠仁に注目する。金忠善の文集である『慕夏堂文集』（1842年重刊本）には「附金誠仁行録」が収録されている。これによると、金誠仁は万暦20年（1592・宣祖25）に金忠善とともに投降し、戦功を重ねたことで金海金姓と誠仁の名を王から賜ったという。

『朝鮮王朝実録』『備辺司謄録』『承政院日記』のような官撰史料に「沙汝某」あるいは「金誠仁」の名は見えない。しかし、万暦48（1620・光海君12）年10月付で「沙汝某」を「嘉善大夫同知中枢府事」に任じる教旨、天啓元（1621・光海君13）年5月付で「金誠仁」を「嘉義大夫同知中枢府事」に任じる教旨と誠仁の子である金貴成を「禦侮將軍虎賁衛上護軍」に任じる教旨等が後孫家に伝来している（金誠仁を始祖とする賜姓金海金氏は、現在は清道咸博金氏を名のっている）。また現存する「大丘府戸籍大帳」からは、金忠善と金誠仁の子孫が婚姻関係を結びながら、代を紡いでいたことをうかがうことができる。降倭「沙汝某」が実在したこと、そして高位武官金誠仁として朝鮮社会に定着し、子孫を増やしていったことは疑う余地がない。

『慕夏堂文集』には金誠仁のほかに、金継守、金継忠のような降倭の名も見える。本発表では『慕夏堂文集』と「大丘府戸籍大帳」をあわせて分析することで、金誠仁らが朝鮮社会をどのように生き抜き、彼の子孫たちがどのように朝鮮社会に定着していったのかを考察してみたい。

4. 「風俗画家」金弘道の誕生 —朝鮮絵画史における価値評価の変遷と構造をめぐって—

東京大学(研) 中 尾 道 子

18世紀後半から19世紀初頭に活躍した金弘道(1745～1806年以降)は、その多彩かつ新鮮な画業もさることながら、同時代の評伝や没後のさまざまな言説によって豊かな画家像が結ばれている。現在、韓国の宝物第527号に指定される国立中央博物館所蔵の『檀園風俗画帖』こそが金弘道の代表作であるという評価は今や周知のこのように思われるが、実際にそうした評価が確立したのは韓国において美術史研究が本格化する1970年代以降のことである。長らく金弘道の代名詞のように扱われてきたこの作品は、近年、姜寛植氏、張辰城氏らによって金弘道の作ではないとする見解が示され、議論を巻き起こしている。

ところで、そもそも金弘道＝風俗画家とする言説はいつごろ、どのようなかたちでつくり出されたものなのであろうか。金弘道を取り上げた姜世晃(1713～91年)らによる同時代評や趙熙龍(1789～1866年)「金弘道伝」(1844年)等の没後、少なくとも20世紀に入るまでの言説に照らせば、金弘道のアイデンティティを風俗画に置くことは妥当ではないことがわかる。

朝鮮絵画史研究において注目すべきは、20世紀に入って、作品が制作され鑑賞されてきたネイティブなコンテクストから離れ、さらに多元的な視点から価値評価がなされるようになった、ということにある。具体的に言えば、作品が制作された当時の評伝に加え、近代的な方法論、新たな学問として美術史が形成されていった時期における関野貞(1868～1935年)、鮎貝房之進(1864～1946年)といった日本人研究者による価値づけの影響、そして、高義東(1886～1965年)、金瑬俊(1904～1967年)、高裕燮(1905～1944年)ら植民地期の朝鮮人による批評である。植民地期の日本人研究者による評価の影響という意味では、そもそも風俗画という言葉自体、西洋から日本に輸入された genre painting の訳語であり、明治時代以降の研究者たちが試行錯誤しながら使用してきた新しい用語である点にも留意が必要である。事実、朝鮮絵画に風俗画の術語を用いたのも鮎貝房之進であり、1918年に『毎日申報』に連載された「朝鮮의 書画」が最初であった。

本発表では、すでに知られた金弘道の評伝を再検討することによって、その画業と言説をめぐり議論を追いながら、朝鮮絵画史における画家の価値評価の変遷とその構造について考えてみたいと思う。さらには、この考察が金弘道という画家の個別的な議論にとどまらず、朝鮮絵画史における枠組みとしての風俗画を相対化し、そこに生じる諸問題を照射することにもつながることを期待したい。

5. 白鳥庫吉が私立成田図書館に寄贈した朝鮮王朝儀軌に関する調査報告

東京大学 辻 大 和

白鳥庫吉（1865～1942年）は日本の東洋史学黎明期の研究者であり、現在の千葉県茂原市に生まれ、帝国大学史学科卒業後、学習院教授や東京帝国大学教授を務めた。報告者は成田山新勝寺（千葉県成田市）境内に1902年に設立された私立成田図書館（現、成田山仏教図書館）に白鳥らが1910年までに寄贈したという朝鮮本67部のうち、朝鮮本7部（1905年寄贈）について2025年前半に数度現地調査を行った。

報告者は2025年1月に近代史料調査のため成田山仏教図書館を訪れた際に、白鳥庫吉が1905年に朝鮮本17部を寄贈したことを知ったが、そのうち、7部は『康熙六年頒行詔書』、『南方平定頒勅』、『太皇太后上尊号頒赦勅』、『王妃冊封勅』、『皇太后伝訃勅』、『皇后封典勅』、『太明世子諭祭勅』と同館OPACに記載があり、プロジェクトで明清中国文書を調査中であったため、別に調査を行うことにした。

2月に現物に関して調査した結果、以上の7部は『迎接都監軍色儀軌』（1667年）、『迎接都監軍色儀軌』（1682年）、『迎接都監都庁儀軌』（1682年）、『迎接都監都庁儀軌』（1695年）、『迎接都監都庁儀軌』（1777年）、『迎接都監軍色儀軌』（1801年）、『迎接都監軍色儀軌』（1830年）であることが判明した。

現在、韓国ではソウル大学奎章閣、韓国学中央研究院蔵書閣、国立中央博物館、国立古宮博物館の4館に朝鮮王朝儀軌が保管されており、ユネスコ世界記録遺産に指定されている。前述の成田山所蔵の儀軌7部は韓国4館の現存儀軌一覧に見当たらないものであり、唯一本の可能性がある。朝鮮政府が明清中国からの勅使を接遇するために臨時に設けた機関を迎接都監というが、迎接都監儀軌の韓国での現存は17世紀に集中しており、最古は1608年、最新は1643年であった。成田山所蔵の迎接都監儀軌は欠落時期を補うものとなる。

報告者は白鳥庫吉の寄贈背景についても文献調査を行った。成田山新勝寺は平安時代の創建以来隆盛し、近代以降も参詣客を集めて発展した。同寺の第15世貫首の石川照勤は五大事業として、同寺周辺に中学校、女学校、図書館、感化院、幼稚園を創設した。白鳥庫吉は1900年から成田中学校の来賓や講演者として名前が登場する。また白鳥は、石川照勤から援助を受けたこと、朝鮮本を図書館に寄贈したことについて回想している。

【参考文献】

『私立成田図書館報告』第9、1905年

『東京大学史料編纂所研究成果報告2024—10 明清中国関係文書の比較研究—韓国所在史料を中心』東京大学史料編纂所、2025年

椎名ゆう子「白鳥庫吉氏寄贈書について」『成田山文化財団年報』16、2025年

6. 1910年代における『童蒙先習』の変容と日本における変容について

京都府立大学(研) 平 木 實

朝鮮時代には、地方における両班及び庶民の子弟の私的教育機関として書堂が全国的に設立されていた。書堂では『千字文』からはじまる漢字の習得について、『童蒙先習』（朴成茂著、1541年）が教科書に用いられて孟子が主張した儒教思想の五倫の道德論を学ぶのが通例であった。それが朝鮮時代末期に至ると、東学農民の乱をきっかけに、中国、日本、ロシアの三国関係が複雑になり、日清戦争で日本が勝利すると、日本は「下関条約」（1895年1月）で、清国の朝鮮にたいする宗主権を排除した。ついで日露戦争に勝利すると、ポーツマス条約（1905年9月）で、日本は朝鮮国を日本の保護国にすることをロシアに認めさせた。国際環境が激変するなかで、高宗は1895年に、国号を大韓帝国とし、日本の圧力を受けながら甲午改革（1894年7月～1895年2月）を行った。第二次改革で教育の分野でも改革が行われたが、成均館と郷校以外に漢城師範学校、国・公立の小学校が設立された。そうしたなかで書堂の教科書の『童蒙先習』の書名が変改された類似書が多数刊行されていた。その点に注目して考察を加えた渡部学氏の先行研究があるが、同氏が「書名が変容したのは朝鮮総督府の圧力を受けたために民族の主体性を生かすための苦難の結果である」と主張している点に若干の疑問を抱き、再考察を加えてみた。その結果、1910年代の初期には、書堂に対しては日本の圧力はまだ及んでおらず、圧力が及び始めたのは1918年以降であり、書名が変容したのは同書の「総論」の歴史記述が、始祖としての檀君朝鮮の記述を守りつつも、すでに時代遅れになっていることに気づいたところから、類似書の編纂者たち自身が書名を変更していったのであり、そうした行動自体が、まさに民族の主体性を確立するための自主的な行動であったと判断するに至った。

また日本においても江戸時代に『童蒙先習』という同名の書物で、儒教的道德教育書が刊行されているが、それらの記述内容は、『童蒙先習』とは異なっており、書名の盗作ではないかと思わせること、そして始祖としての檀君朝鮮を主張する『童蒙先習』の存在を認めず、天照大神を始祖として主張する内容に変更した類似書が刊行されていたことについて考察を加える。そのために、つぎのような目次に沿って簡潔に報告する。

- （1）書名変容の様態
- （2）書名変容の要因と歴史記述
- （3）日本における『童蒙先習』の受容の変容

7. 植民地朝鮮における「畑作改良増殖計画」 —食糧畑作物としての粟と大麦を中心に—

熊本学園大学 土 井 浩 嗣

植民地朝鮮において農業政策の中軸となったのは、米（水稻）である。併合当初から米は朝鮮の重要農産物として最優先で改良増殖が進められ、日本内地の米不足を補うために大量に内地へと移出された。その結果、従来の植民地期農業史研究でも「産米増殖計画」を筆頭として米が常に研究対象の中心であった。しかし、朝鮮半島は中国大陸の華北・東北地方の畑作地帯と日本列島の稲作地帯の中間にあり、畑が耕地面積の62.5%を占めるなど、半島全体で見れば畑作優位地帯である。そこで、本発表では、朝鮮半島の風土の特徴を踏まえて、植民地朝鮮の食糧畑作物のうち、米とならぶ主食作物であった粟と大麦に焦点を当て、朝鮮総督府の食糧畑作物改良増殖政策、特に1931年の「畑作改良増殖計画」の樹立とその内容について考察を行う。

植民地朝鮮では、1912年の米作・棉作・蚕業・畜牛の改良増殖に関する訓令から農業政策が本格的に開始されるが、10年代を通じて粟・大麦などの食糧畑作物は軽視されつづけた。朝鮮総督府が畑作を専門とする試験研究機関として勸業模範場西鮮支場（黄海道沙里院）を開設したのは、1920年のことであった。20年度から「産米増殖計画」が開始されると、米の増産と合わせてようやく初めて「米以外ノ食用作物ノ改良増殖」が指示されることになった。なかでも朝鮮南部で米の裏作として主食作物であった大麦（六条オオムギ）と朝鮮北部の主食作物であった粟はその中心であった。まず1925年に各道を主体とする食糧田作物改良増殖に関する年次計画が実施され、さらに満洲粟の輸入急増を背景として、1929年度から「西北鮮」を中心とする畑作地帯の6道で、粟を主とした畑作改良増殖計画が開始された。そして、1931年度より朝鮮全体での「畑作改良増殖計画」が樹立されるのである。

この計画は、麦類（大麦・小麦・裸麦）、大豆および粟の3種類の畑作物を対象に、1931年度から12年間にわたり朝鮮全土の200郡島で改良増殖を実施するものである。具体的には、優良品種の育成・普及、畑作改良指導團・組合の設置などの方法で、反当り収量の増加と作付反別の増加を目指すものであった。「産米増殖計画」とは異なり、土地改良事業や金肥購入が計画に含まれていない点は大きな特徴である。

なお、計画の実績に関しては不明な部分も多いが、粟や大麦などで早期に目標を達成していたと見られる。また、『朝鮮農会報』等の断片的資料から、各道における畑作改良組合や田作改良指導など計画の実施状況の一端についても明らかにする。

植民地朝鮮における農業政策は、米を軸に朝鮮南部を中心に展開されていくが、畑作優位地帯である朝鮮半島では、むしろ粟や大麦など畑作物こそが独自の発達を遂げた領域であった。植民地期を通じて粟や大麦でも近代農学の導入が見られるが、その改良増殖では米とは違った困難と限界に直面することになったと考えられる。

8. 「三宅事件」後の京城帝国大学法文学部

武蔵高等学校中学校 通堂 あゆみ

1934年5月21日に京城帝国大学法文学部教授(財政学講座担当)・三宅鹿之助および助手・鄭泰植が共産主義運動に関与しているとして検挙され、25日に引致された。これにより朝鮮共産党再建・労働組合運動を進める李載裕(西大門警察署に検挙されるも留置場から逃走中であった)を大学官舎に匿っていたことが発覚し、同年12月に治安維持法違反と犯人蔵匿により三宅は懲役刑を受けた。「三宅(三宅鹿之助)事件」とよばれるものである。三宅自身は休職を経て刑の確定により失職することになったが、いわばその“犠牲”により匿われていた李載裕はそのまま逃亡し活動が続けることができたため、三宅は「当時日本人としては稀な、朝鮮革命につくした優れた共産主義者」(『朝鮮社会運動史事典』社会評論社、1981年)と評価されている。

三宅がどのように社会運動を展開したか、李載裕との連携の実態についてなど研究が進められてきているが、本研究の関心は事件時の京城帝国大学法文学部内部のうごきにある。現職教授の起訴であり、大学官舎が搜索を受けたことから京城帝国大学当局も「非常に狼狽」し「対策に腐心」(『東京朝日新聞』1934年5月26日)したと伝えられるが、大学側の対応はとくに注目されてこなかった。それは史料的な限界のためでもあり、京城帝国大学創立五十周年記念誌『紺碧遙かに』(1974年)において、犯人蔵匿という罪状が学問の自由や大学自治権からも三宅を擁護できず、「何とも抗議のしようも無く成行きを静観する姿勢」(安田幹太：民法・民事訴訟法第3講座担当)をとらざるをえなかったり、「三宅君の問題は学校そのものとは無関係」(鈴木武雄：経済学第2講座担当)と、あくまでも三宅個人の問題とみなしたりする回顧が見られたためであろう。しかし実際には大学自治とは無関係とはいえない事態も起きていた。

本研究は安倍能成の日記および書簡という同時代の史料を利用することにより、事件後の大学・法文学部内部の具体的な議論や対応を明らかにすることを試み、三宅事件の大学学内行政への影響を論じる。

京城帝国大学法文学部は設立計画時より「法律、政治、哲学」の教授は学生(とくに朝鮮人学生)の思想問題につながるとの危惧が示されていた。法文学部という複合学部における法科系と文科系の微妙な緊張感や対立をも含め、史料に基づいて大学運営の実態に迫ることを目指し、同時に“リベラリスト”安倍能成の再評価も試みる。

9. 「皇国臣民」と民族間の序列 —「皇民化」政策の見直し—

桃山学院大学 青 野 正 明

今日、「日本人ファースト」（選挙でのキャッチコピー）の暴走が危ぶまれている。私は、平等を装いながらも日本人を一番にする考え方の起源が、戦前に民族間に序列を生み出したナショナリズム、つまり帝国主義的な多民族ナショナリズムにあるのではないかと推測している。そのような推測のもと、本発表では、1930年代後半以降、拡大した帝国日本の版図で、支配された人々が「皇国臣民」として日本人の下に置かれ、戦争動員に従わされた史実を取りあげる。そして、「皇国臣民」の新たな定義を示しながら、それがもつ〈序列〉の論理と〈対等〉の論理を考察しよう。

1936年1月、植民地朝鮮で本格始動した心田開発運動というナショナリズム政策で、朝鮮人に確定すべき「帝国臣民としての地位」が模索された。つまりこの時期、1920年代までの単一民族ナショナリズムによる「同化」政策は終わり、朝鮮人は擬似的な多民族国家の「帝国臣民」となることが求められ、心田開発運動で〈序列〉と〈対等〉という二通りの解釈が生まれた。そして、朝鮮人は「帝国臣民」になるために、帝国主義的な多民族ナショナリズムナショナリズムが押し付けられていく。

その時点の「帝国臣民」創りは、台湾では「皇民化」、満洲では「日満一体」、朝鮮では「内鮮一体」のスローガンに集約され、1937年の日中戦争勃発後も継続する。朝鮮におけるこの時期の「内鮮一体」からは、心田開発運動でのそれと同様に〈序列〉と〈対等〉という二つの論理が見出せた。それら二つの論理の使い分けにより、朝鮮での「帝国臣民」創りは、帝国主義的な多民族ナショナリズムを押し付ける「皇国臣民」化の、つまり「皇民化」（略語）の強要となる。

ここで、宮田節子氏による「皇民化」政策の定説と対比しておく。宮田説の「同化の論理」は、「内鮮一体」の〈序列〉の論理に対応し、「差別からの脱出」の論理は、同じく〈対等〉の論理に対応している。私は宮田説を参考にして新説を提唱した。

では、〈対等〉の論理がアメの役割を果たした経緯を概観しよう。「皇国臣民の誓詞」（1937年10月）の文案を作った李覚鍾と、彼が主導した大東民友会（朝鮮人「転向」者の団体）は、学務局社会教育課との協力関係の中で、朝鮮人の血族保証を信じ、「内鮮一体」の〈対等〉の論理も信じ込み、この論理を宣伝した。その後、この論理は「皇民化」政策により社会に拡散・浸透していく。

次はムチとなる〈序列〉の論理に移る。その後、総督府当局が総動員体制を築き、朝鮮人を動員させる中で、〈対等〉の論理が見せかけだけになる。そして、〈序列〉の論理が際立ち、日本への服従のみが強調されたと見られる。その結果、朝鮮人は戦時体制への動員を強いられ、天皇への忠誠心も強要され、言語をはじめとする文化や制度・法令面での「同化」もまた強力に推進されたと考えられる。

10. 「昭和 19 年」の京城帝国大学

九州大学 永 島 広 紀

京城帝国大学に関する基本データを繙く際、最も使用頻度が高い資料は『京城帝國大學一覽』であろう。ただし同一覧は「昭和 17 年度」が最終のものであり、その刊行は昭和 18 (1943) 年 3 月である。そのため、次年度に跨る規則の変更など（例えば法文学部の哲学領域に「社会学専攻」を追加）は若干反映されているものの、大学（学部）の一覧にて 1943 年 4 月以降の状況を知ることは出来ない。なお、旧制高校に相当する『京城帝國大學豫科一覽』は「昭和 18 年度」（1944 年 9 月発行）までが刊行されており、おおむね 1943 年度の前半期までの情報が収載されている。また、『京城帝國大學學報』が 1944 年 1 月発行分まで残存（一部に記事の欠損あり）しており、『學叢』（法文学部の「文学科（旧「哲」「史」「文」の各学科が一本化）」が発行母体）や『理工學部々報』所載の記事などで補うことにより、辛うじて昭和 18 (1943) 年度までは公的な刊行物に依拠した動静の確認が可能である。

しかしながら、昭和 19 (1944) 年度以降に関する教職員人事、学部学生・予科（さらには理科教員養成所の）生徒の入学 / 卒業、あるいは規則等の改廃状況は、「博士学位」の授与に関する貴重な先行研究を除けば、依然として未確定の状態に置かれたままである。すでに戦時の繰り上げ入学 / 卒業や、文科系学生・生徒の「学徒出陣」も始まり、その多くは卒業期を待つことなく、1945 年 8 月の「敗戦」 / 「光復」を経て、いわゆる「内地人」と台湾人の場合は編入先の大学・高等学校へ学籍を移動させていくことになる。

一方、京城帝大に在学中の朝鮮人学生・生徒の場合はどのような状況であったのか？ なんとすれば、彼らは 1945 年 9 月以降、米軍政下の「京城大学」（および予科）に編入され、翌年に同大を卒業していく者、あるいはその下の学年は 1946 年 9 月に誕生する「ソウル大学校」の“旧制 3 年制”の課程に再三にわたって編入され、これを順次に修了して卒業していく者たちであった。逆に「内地」の帝大や旧制高校（旅順を含む）に学んでいた朝鮮人たちが帰還後の朝鮮内で従前のステイタスを維持するためには、さしあたって 1945 ～ 46 年の段階においては京城大学・同予科への編入以外に方途は存在しなかった。

かような京城帝大の「終焉」期を検証するためにも、あるいは京城帝大・京城大学・ソウル大それぞれの「断絶」と「連続」とを見極めるためにも、その階梯としてまずはやはり「昭和 19 (1944) 年度」の復元作業が必要であることは言を俟たない。本報告は、『朝鮮総督府官報』（漏れ部分は『法令全書』などで補充）や若干の新規史料、あるいは戦後における同窓会関係の資料等を組み合わせつつ、実際のデータに基づき京城帝大における「編年」の空白を埋める作業を行おうとするものである。

11. 龍安寺方丈襖絵にみる戦後の文化的潮流 —金剛山の描写をめぐる朝鮮への視線と禅的空間—

立命館大学(講) 朴 株 顯

1994年にユネスコの世界文化遺産に登録された大雲山龍安寺は、石庭を擁する禅寺として、国内外で広くその名を知られている。しかし、この石庭の作庭時期や制作者については確証のある史料がなく、現在に至るまで研究者の間で議論が多く続いている。さらに、世界的な関心の高まりを背景に、伝統的な美学的・宗教的観点に加え、近年では科学的手法やデジタル技術を用いた多角的な研究も進展している。

一方、この石庭が設置されている方丈についての研究は相対的に手薄であり、特に襖絵に関しては十分な検討がなされてきたとは言いがたい。現在、石庭に面する方丈の襖には、第57世住職・松倉紹英の依頼により、1952年から5年をかけて皐月鶴翁(1882～1981)が手がけた朝鮮半島の金剛山の風景が描かれている。明鏡台をはじめ、長安寺、萬物相、海金剛などの名所が詩文とともに、仏間と室中を除く方丈の全室に描かれている。

禅寺の襖絵において、実在の風景が全面的に描かれる例は極めて稀であり、また戦後間もない時期に朝鮮半島の金剛山が画題に選ばれた点も注目に値する。本報告では、なぜ龍安寺方丈の襖絵に金剛山が描かれることになったのか、その背景と意義を考察する。

第1章では、各部屋に描かれた金剛山の名所が、実際の方位や四季だけでなく、当時の探勝路に基づいて表現されている点を確認する。第2章では、襖絵に添えられた詩文や描写技法から、その意図を探る。結果として、方丈の各部屋の用途に応じて、石庭の反対側に配置された詩文は金剛山の壮大な景観を賛美し、主に個人的な感動を語る内容が多いことに注目する。一方、石庭側では、静謐な自然を通じて修行者の精神性を表現し、禅寺にふさわしい内容になっていることが指摘する。また、描写方法についても、前者は観光名所を主題に着色で描かれ、後者は実在する禅寺を中心に墨のみが用いられており、いずれも実景の再現ではなく、主題の雰囲気重視した抑制的な表現となっていることを指摘する。第3章では、こうした表現の背景に皐月鶴翁の個人的動機に加え、1950年代に高まった禅文化への関心があったことを指摘する。すなわち、1952年、朝鮮戦争が続くなかで制作を始めた皐月には、数回の訪問経験に基づく金剛山への特別な郷愁があった。また、当時高まりを見せていた禅文化の国際的展開による石庭や方丈空間の再解釈が、襖絵の構成に大きな影響を及ぼしていた可能性も指摘できる。

以上より、本作は皐月の個人的思いにとどまらず、戦争という時代背景や禅文化の再解釈の潮流を反映した作品と言えよう。今回は詳細に論じなかったが、朝鮮半島の風景を画題とすることを許した住職・松倉紹英の判断も重要である。ビルマ戦線従軍や戦没同僚の追悼碑建立という彼の経歴を踏まえ、今後はこれと本作の関係についても検討を深めたい。

12. 韓国社会における在日コリアンの同胞化と言説の変容

—ブルーベーカーの「越境的ナショナリズム」と「外的な帰属の政治」を手がかりに—

神田外語大学(講) 小 川 一 枝

本発表は、韓国社会において在日コリアンがいかに「同胞」として再構成されてきたのかを、1990年代以降の学術的言説と制度の変化に注目して考察する。特にブルーベーカー(2022)が提起する「越境的ナショナリズム」と「外的な帰属の政治」の概念を手がかりに、国家が国境外にいる民族的親族集団をどのように文化的・制度的に包摂してきたのかを分析する。

方法として、韓国国内の学術情報データベース RISS において「在日コリアン」を指す7つのキーワードで学術論文を検索し、2635編の論文を13カテゴリーに分類した。1990年代以降の量的・質的な変化を可視化した。その結果、〈文学・芸術〉〈移民・ディアスポラ〉〈国籍・アイデンティティ〉を中心とするカテゴリーの急増が確認され、在日コリアンが韓国国内で「越境する同胞」として認知・包摂されてきた言説的展開が明らかとなった。

学術論文を対象としたのは、政策資料や報道と並んで、学術的言説もまた国家のナショナル・アイデンティティ構築に参与する言説実践であると捉えるからである。特に韓国では、在外同胞財団など国家主導の研究支援制度が存在し、制度と研究が相互に関連しながら「誰が同胞か」という問いを反映・再生産している。

また、1999年の在外同胞法によって「国籍」に依存しない血統ベースの包摂が進み、2023年の在外同胞基本法では朝鮮籍保持者を含む法的包摂が実現された。これは、国家がナショナル・アイデンティティの枠を越えて越境的なメンバーシップを再構築している過程と捉えられる。

本発表は、在日コリアンに対する「越境的包摂」の構造を、国家政策と学術的言説の対応関係から捉える点に独自性がある。国家が誰を同胞とみなすのかという問いは、制度の変化だけでなく、学術的な表象と語彙の変化においても現れる。本研究を通じて、韓国社会における在外同胞の言説的構築の動態と、グローバル時代におけるナショナリズムの再編過程を考察する。

【参考文献】

- ブルーベーカー, R. (2022) 『グローバル化する世界と帰属の政治』 吉原直樹・渡名喜庸哲訳、明石書店。
김봉섭 (2008) 「재외한인연구의 흐름과 과제」 『국제문제연구』 7, 25-54.
전호성・황혜경・임영언 (2024) 「재외동포기본법 제정의 의미와 과제」 『입법정책연구』 45, 115-139.